

知床の野生動物と子供達とのふれあいを深める活動

知床自然教育研究会

代 表 中 川 元

はじめに

知床半島は原生的自然が今なお残されている地域として知られています。原生林や自然草原、湖沼や湿原などの多様な環境が、海岸から高山帯に至るまで連続して保存されています。そこにはオジロワシやシマフクロウなどの大型猛禽類、ヒグマやエゾシカなどの大型哺乳類が生息し、また、周囲の海にはアザラシ類やトドなどの海獣類が見られます。海岸断崖はウミウなどの海鳥のコロニーとなっており、そこは近くに営巣するオジロワシの餌場にもなっています。冬にはオホーツク海を南下した流氷が知床半島をとり囲み、オオワシをはじめとする氷の海をすみかとする動物達も数多く渡来します。知床半島では、このように豊かな動物相が残されているとともに、動物達の生活が自然本来の姿を保っていることが大きな特徴になっています。

知床自然教育研究会のメンバーは、地元の博物館学芸員や学校教諭、役場職員、北大の教官、大学院生らによって構成されています。私達は約10年前から知床半島の哺乳類や鳥類、昆虫類などについて生態学的な調査や研究を進めてきました。また、このすばらしい自然を多くの人達に知ってもらいたいという思いから、様々な自然観察会を開催したり、動植物のガイドブックなどを作成してきました。

最近の子供達は勉強や習い事に追われ、自然に接する機会が少なくなってきています。それは都市の子供達はもちろんのこと、地方の子供達も同様の傾向が強くなってきています。自然観察会や自然教室をとおして身近な自然や原生の自然にふれ、様々な体験や学習の中から正しい自然観や自然認識を育てることがますます重要になって来ていると考えられます。

特に知床半島は、オジロワシやエゾシカなどの動物を直接観察できるフィールドとしては他に得がたい地域となっています。条件を整えば、ヒグマの観察を安全に行うことすら可能です。こうした動物達は、自然生態系の頂点にある動物であり、その生命感や躍動する姿が見る者に与えるインパクトは他には替えがたいものがあります。私達は、こうした

大型動物を対象とした自然観察の方法・技術について研究し、試行してきましたが、動物に与える影響を極力少なくするとともに、参加者が安全にじっくりと観察のできる方法を確立しつつあります。これらをベースに子供達と知床の動物達のふれ合いの機会を作ってゆこうとするのが、会の目的となっています。

1. 活動の内容と成果

昭和62年11月に、町内の川上小学校の生徒を対象に「夜の動物観察会」を実施しました。エゾシカやキタキツネは日没後活動が活発になります。夕方、教室に集まった生徒に観察の方法や注意について話をした後、バスに乗って知床国立公園の中に入りました。動物の発見や観察は、哺乳類の調査法の一つである「ライトセンサス法」を応用したものです。両サイドからライトを照らしながらゆっくり進むと、ライト係の子供から「いた！」と合図があります。暗やみの草原に、いくつもの目がライトに光っています。エゾシカの群れです。大きな角を持ったたくましいオスジカの姿。草を食べるメスジカやそのそばによりそう当年生まれの子ジカ。メスジカをさかんに追い回すオスもいます。しばらく進むと、キタキツネが林の中から飛び出し、ときどき立止まってこちらを見ながら、草原をかるやかに走ってゆきました。この日は18頭のエゾシカに出会えたほか、夜の知床の森の自然を体験し、子供達は強い印象を受けたようです。

昭和63年5月には、船を使って春の知床の野生動物の観察会を実施しました。地形が険しく陸路のほとんど無い知床では、海からの観察が効果的な方法の一つです。参加者は小学6年生18人。ウトロ港を出た小型船は、海岸の断崖に沿って進みます。断崖にはウミウやオオセグロカモメがたくさん営巣しており、コロニーとなっている岩場は鳥たちで騒然としていました。断崖の岩場ではオジロワシを観察することができました。オジロワシは断崖の上部、海面から100m以上もの高さに生えている大木に営巣しています。巣は直径2mもの大きなもので、海からも見つけることができます。この観察会では2カ所で、オジロワシの巣を観察しました。うち1カ所ではヒナが巣から頭を出しており、逆光に頭部の幼羽がキラキラと輝いて見えました。巣のすぐ上の枝にはオジロワシの親鳥が止まり、鋭い眼であたりを見わたしています。船の上の子供達は双眼鏡をはなさずに、この様子に見入っていました。オジロワシはデリケートな鳥であり、営巣期に人が巣に近づくことは避けなければなりません。もっとも、営巣地近くまで、子供達と一緒に近づくことは大変

困難でもあります。船上から、海をへだててオジロワシを観察する方法は、営巣活動に影響を与えず、参加者も安全かつじっくりと観察できる方法です。こんな方法は、知床だから可能になる観察法ともいえます。

海上ではアカエリヒレアシシギの大群にも出合えました。北の繁殖地への渡りの途中、知床半島の沿岸で羽を休めているものです。船が群れの中に入ると、水面に浮かんでいたヒレアシシギが右へ左へと散ってゆきます。ほかに、赤い足の美しいケイマフリやオレンジ色のくちばしのウトウなど様々な海鳥を観察できました。また、海岸の斜面や草原にはエゾシカの群れやヒグマが出ていることがあります。この日も皆で注意しながら探しましたが残念ながら見られませんでした。しかし、ヒグマやエゾシカがどんな所を生活の場とし、何を餌としているかなど、実感として学習することができました。

観察会の終了後、子供達に感想文を書いてももらいました。印象に残ったことは、やはりオジロワシの巣やヒナを見たことが一番だったようです。ほかに、カラスがオジロワシにまとわりついていたこと、止っているオジロワシがびくとも動かなかったことなども興味深かったようです。そのほか、カモメに糞をかけられたこと、ウミウが日光浴をしていたこと、岩の陰に流水が残っていたこと、学校の近くにいるハクセキレイが海にもいたことなども印象に残ったようです。そして、地元の知床の自然のすばらしさを知ったことの喜びや、この自然をいつまでも大切にしたいという願いを記した子供も少なからずありました。

冬の知床には流水が渡来し、海を埋めつくします。その頃、流水とともに北から訪れる動物も少なくありません。オオワシもその一つです。美しいオレンジ色をした大きなくちばし、白と黒のコントラストのあざやかな翼、青空をバックに飛翔する姿は世界一美しい鷲の名に恥じません。昭和63年1月に、知床の海岸線をフィールドに「オオワシ・オジロワシ観察会」を行いました。この観察会は毎年実施し、今年で9年目になります。この日は斜里町ウトロ付近の海岸約20kmの間で、オオワシの成鳥11羽、幼鳥1羽、オジロワシの成鳥1羽を観察できました。また、流水の間に浮かぶウミガラスやウミスズメ類、ホオジロガモ、クロガモなどの冬の間ガモ類も多数観察できました。

「知床自然教室」は、地元斜里町の子供達と関東地方の子供達が合同で行う自然教室です。小学校4年生から高校3年生までの約60人が1週間にわたって、野外生活や動植物の観察、自然の調査活動を行います。昭和62年には7月31日から8月9日まで、63年は7月

30日から8月6日までの期間、知床国立公園の大自然の中で様々な活動を行いました。草原や森林の自然観察ではヒグマがフキを食べた跡や糞も見られました。草原の大きな石をひっくり返した跡もあります。それは石の下に巣を作っているアリを食べた跡です。エゾシカの足跡や糞もいたるところにありました。エゾシカは夕方になるとキャンプ地の近くにも姿を見せました。草原にはノビタキやホオアカ、空にはアマツバメも飛び回っていました。自然教室では沢歩きや登山もあります。沢の途中では釣りも楽しみました。ヤナギの枝を釣り竿に、餌は石の下にいるカワゲラやカゲロウの幼虫です。オシヨロコマやヤマメなどの溪流の魚が、小学生にもおもしろいように釣れ、あちこちで喚声があがりました。羅臼岳登山では、ノゴマやホンガラスなどの高山帯の鳥を観察したり、満天の星の下で稜線の一晩を体験したりすることができました。

これまであげたほかにも昭和62年8月には知床の蝶やハチなどの昆虫をテーマにした講座を開催したり、同じ8月に国立公園内の幌別台地の天然林をフィールドに「自然満喫観察会」の名称で様々な鳥やけもの、その残したフィールドサインなどの観察会を実施しました。

これらの観察会や教室に参加した子供達は、それぞれに、知床の様々な野生動物に接することができました。その印象や感動も様々だったようです。しかし、自分達の生まれ育った町に、このようなすばらしい自然が残されており、たくさんの野生動物が生き生きと暮していることに驚きと感動をいただいたことは確かなようです。

おわりに

この活動は今後も継続して行う計画です。この後予定している活動には、流水期に船を利用して流水上にいるアザランやオオワシを観察するものや、哺乳類の観察会（今年10月）があります。また、秋の斜里町上空を通過するオオハクチョウの調査や、流水期に知床に多数渡来するオオワシ・オジロワシの一斉調査などを子供達と一緒に計画です。

知床に自然の中で様々な活動を行い、色々な体験を重ねることで、子供達は自然の本来の姿を知り、その価値や大切さを自から学ぶことができるでしょう。そして、自然を守る次の世代として立派に成長してゆくことが期待できると思います。



春の野生動物観察会 1988.5.27



知床自然教室 1988.8.2